

○ 伊藤ハムが第2四半期決算を下方修正、中元やセシウムなどが影響

【大阪発】伊藤ハム4日、3月期第2四半期連結予想を修正発表した。売上高は当初予想を3億円下回り2,217億円(前期比0.2%減)、営業利益は15億円下回り5億円(前期は約4.4億円の損失)に、また経常利益は同じく15.6億円下回り12.4億円(同約1.2億円の損失)、四半期純利益は7.6億円下振れし2.4億円(89.9%減)とそれぞれ下方修正した。

中元ギフトの販売不振や食中毒事件やセシウム問題など食肉の事業環境が厳しかったことなどから予想を下回る見込みとなった。特別損益は損失の発生額が当初見込みに比べて減少したが、経常利益の下振れに伴い四半期純利益についても前回予想数値を下回る見込みとなった。なお通期予想は、修正なし。

○ 第50回実りのフェスティバルが開催、被災地はじめ各地のブランド肉が展示・販売

農水省・日本農林漁業振興会主催の「第50回農林水産祭 実りのフェスティバル」が4～5日、東京・江東区の東京国際展示場で開催された。農林水産業と食への理解増進、消費拡大につなげるため、都道府県らの協力のもと各地の農産物の展示・即売会を実施するもの。全国のよりすぐりの農産物が購入できるとして、場内は終日多くの来場者でにぎわった。2日間で4万5千人の来場を見込む。

東日本大震災からの復旧・復興を願って復興支援コーナーが設けられ、仙台名物の牛タンなど被災地産の農林水産物の展示・即売なども行われた＝写真。都道府県・団体の展示スペースのうち東京都コーナーではブランド豚「TOKYO X」が展示され、試食やロースのスライスパック、バラエティパックの即売が行われた。流通事業者らで組織する「TOKYO X-Association」の植村光一郎会長によると、今回は都内都農産品ののうちTOKYO Xが10年ぶりに推薦され出展に至ったという。植村会長は「TOKYO Xはアニマルフェアなど肉豚を健康的に育てるなどこだわりを持って生産され

ており、流通、消費者を交えたアグリフードチェーンを構築することで、再生産が可能になっている。震災以降もTOKYO Xは比較的安定した販売が続いており、元気のあるTOKYO Xがけん引役となり他の農畜産物も盛り上げてゆければ」と語る。栃木県コーナーでは「とちぎ和牛」が出展された。JA全農とちぎによると「出荷再開後も枝肉価格は以前の3割近く落ち込んでいるなど厳しい状況が続いているが、ここは踏ん張って、今後も試食やキャンペーンなど通じて消費者への理解を深めてゆきたい」と話していた。このほか、群馬県は高崎ハムが県産豚肉を使用した「赤城の郷」加工品シリーズを販売していたほか、宮崎牛(宮崎)、常陸牛、ローズポーク(茨城)、山形牛、庄内ヨーク(山形県)などの銘柄肉が展示。日本食肉消費総合センター、日本ハンバーグ・ハンバーガー協会も出展していた。



○ 1月末まで東日本銘柄肉の応援キャンペーン実施—消費総合C

日本食肉消費総合センターは1日から12年1月31日まで、「東日本銘柄食肉 食べて応援! キャンペーン」(JRA日本中央競馬会特別振興資金助成事業)を実施している。特設サイト(<http://www.jmi.or.jp/ouen/>)で東日本の銘柄食肉を紹介するほか、それらを取り扱う販売店・レストランを掲載している。キャンペーン参加店で配布されるハガキや特設サイトで応募すると、抽選で東日本銘柄食肉が当たる企画も実施している。

東日本大震災で東北・関東地方の畜産農家

では飼料の供給不足や原発事故による風評被害など、深刻な問題に直面している。彼らの復興を支えるためにも、同



地域での銘柄食肉の消費拡大につなげるもの。特設サイトでは各県の銘柄食肉が掲載され、それぞれ銘柄肉の取扱い店舗のリンクが貼られており、各通販サイトから購入も可能だ。